

第171号

ほほえみの会

2011.4.10

震災から2ヶ月、福島県は世界の「FUKUSHIMA」になった。原発被害は世界を揺るがすニュースになっている。

周辺地域に住む人たちは慣れ親しんだ故郷を捨ててはいけぬ。自然溢れる地で幸せに暮らしてきた人達の日常が奪われた。避難生活を強いられている方々は、まじめに幸せに暮らして来られた方々だ。これは天災ではない。人災である。

沿岸の魚からは放射性物質が検出され、遠く離れた神奈川でもシーズンを迎えた新茶が汚染された。

その被害は拡大している。将来に向けて大きな不安も残る。特に放射能は子供への影響が大きいといわれ心配は尽きない。

「3日分の身の回りのものを持ってバスに乗れ」と言われたチェルノブイリの住民は、以来25年間家には戻っていない。

原発は安全だといってきた国や電力会社の責任は大きい。家を流され、家に戻れない被災者が避難所で辛い思いをしているときに国の震災対策副本部長の国会議員がフィリピンでゴルフを楽しんでいた。意識を疑う。というか、議員失格だ。

電力会社の社長、会長の年収が7200万円だそうだ。半額の返上を申し出たが国が認めず全額返上に変えた。当たり前だ。

確かに今の文化生活を支える原子力発電の貢献は大きい。でも、事故の代償はあまりにも大きい。今回の事故は電気に頼る今の生活様式の見直しも求められる。少し時計の針を戻す生活も必要だろう。

ただ、災害はまだ終わっていない。原発の放射能漏れは今も続いていて、対策の知恵が毎日求められている。

1日も早い原発事故の収束を願う。家族そろって自分の家

に住む。そんな当たり前の幸せを望みたい。

<190回 4/10ほほえみの会>

堀越医師、加藤認定看護師含め5名の参加でした。

▽ 1歳4ヶ月、女の子。急性骨髄性白血病。風邪だと思って近くの医院にかかったが、熱が下がらず血液検査をした。しかし値が大きすぎて分からないということで、医療センターで再検査したところ、そのままこども病院へ回され、すぐに入院。白血球が42万と多かった。家が遠いので病院近くにアパートを借りた。医師の話聞いて母親としては治ってくれると信じるが、周りの人が厳しい見方をする。父親もネットなどで情報を取り、抗がん剤のことや移植など不安を口にする。今後再発をしないか心配。

<191回 5/8ほほえみの会>

5名の参加でした。

▽ 小学4年男の子。急性リンパ性白血病。これまで元気なサッカー少年だった。蹴られてあざが出来たので近所の医院に行ったが、こども病院にいた先生ですぐにこども病院を紹介された。本人は入院イコール手術と思っていたようだ。ハイハイリスクで6月の完解を目指す。

▽ 小学1年男の子。急性リンパ性白血病。今年に入って背中が痛いと言い出した。春休みに風邪を引いて小学校に行くようになってからも疲れるということで診て貰った。血液検査の結果、総合病院で白血病といわれこども病院へ。2ヶ月前に妹が誕生した。白血病はテレビの世界のことだと思っていたので驚いた。

▽ 1歳7ヶ月、急性骨髄性白血病。発熱があり風邪を引いた様子なのでかかりつけの医師に見せたところ、すぐに総合病院へ救急車で運ばれ、その後こども病院へ。慣れない病棟で泣いていることが多い様子、面会時間より早く来て面倒を見ている。4歳の姉がいるが祖父母が面倒を見てくれている。

次回 は6月12日(日) 11時からです
ほほえみの会 代表 池田恵一 TEL054-247-9560
E-mail アドレス k_likeda@yahoo.co.jp
ホームページ <http://www.geocities.jp/hohoeminokai/>